

インペルダウン最下層の自由人な囚人 完

ケツアゴ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

インペルダウンに元ロジャー海賊団の問題児がいたら（尚、自分の意志で勝手に入った）

目次

その後のあれやこれ	⑥	47
その後のあれやこれ	⑤	42
その後のあれやこれ	④	36
その後のあれこれ	③	30
その後のあれこれ	②	24
その後のあれこれ	①	18
下		12
中		6
上		1

上

海底監獄インペルダウン、世界政府の威信の元に運営される難攻不落の要塞と言える場所。

その中には賞金額が億を越えている者や表沙汰に出来ない重大犯罪者も収監されており、現在の所脱獄に成功したのは空飛ぶ海賊“金獅子”のシキのみである。

だが、脱獄こそしていないが騒動は起きている。

……それこそ頻繁に、それも同じ囚人によって……。

「脱走！ 脱走だあ!!」

「またあの男かあ！ 食糧庫！」

「既に荒らされています！ ついでに副署長の部屋から酒を持って行かれました！」

「囚人消毒用の大釜！」

「タオルと石鹸を持ち込んで入浴済みです！」

この日、脱走したのは最下層、存在すら秘匿されるレベルVI無限地獄に自ら勝手に住み着いた老人だ。

囚人がやって来た時に殺菌消毒の名目で投げ込まれる煮えたぎった大釜は一目で入浴後だと分かる有り様で、石鹸の泡やら使った後で干したタオルやらがある。

これでは実際に投げ込むまで囚人への威圧感が減ってしまうだろう。

「署長は何処だっ!？」

「トイレです！」

「あーもー！ これを機に署長になりたい！」

この様な騒ぎ、実は週に一度や二度は起きている。

囚人達も騒ぎには慣れているのか騒ぎが忙しくて拷問が疎かになる為か平然としていた。

「糞っ！ ルヴァイドオオオオオ!!」

そんな脱走常習犯の名前はルヴァイド、海賊王ゴールド・ロジャーの元クルーである。

そんな彼が何をしているのかというところ……。

「あゝ、整う。灼熱地獄の後の極寒地獄は最高じゃな」

雪の中に体を埋め、灼熱地獄で火照った体を冷やしていた。

本来数千万から億近くの賞金首でさえ拷問として成立し、凍り付いて動けなくなる場所でさえサウナの後の水風呂程度。

緑色の髪をオールバックにして逞しい巨体、それが上半身裸の状態
で雪に寝転がって降り積もる雪を気にもせず凍り付いた分厚い
ベーコンを口に運び、凍ってしまったウイスキーを口の中で噛み砕く。

「グルルルル……」

ルヴァイドの耳に届いたうなり声と雪を踏みしめる足音、他の階層にて囚人を襲う役目を持つ猛獣すら食べてしまいかねない凶暴さ。

「なんだ、軍隊ウルフ共。儂に相手をして欲しいのか?」

上半身を起こし、肉を食い終わった骨を手取るなり振り上げる。

「ほら、取って来い!」

「ワウーン!」

勢い良く投げられた骨を軍隊ウルフ達は我先にと追い掛けて行く。

先頭の一匹が空中でキャッチし、尻尾を振りながらルヴァイドの元まで持つて行くなり再び投げられたのを追い掛ける中、三度目を投げようとした彼の手が止まった。

「今回は少し早かったな。おい、お前達。遊んでやるのは此処までだ。五月蠅いのが来たからな」

もう一度骨を投げ、軍隊ウルフ達が骨に視線を奪われた瞬間、彼の姿はその場から消え去り、五分後に荒い足取りで所長であるマゼランが姿を見せた。

「彼奴め、本当に忌々しい奴だ」

肩を落とし、毒を含むため息を吐き出したマゼランは表情を引き締めるど歩き出した。

「ふんふん、クロコダイルの奴が七武海の資格を剥奪されて逮捕か。此処に来るかも知れんのに」

「大佐如きにやられただど？ 馬鹿馬鹿しい。前半の海での半隠居で幾ら鈍つても俺様と渡り合つてた奴だぞ。ガセだな」

三日に一度のサウナを済ませた儂は自宅である無限地獄へと戻り、自分の檻に入る前にバレットの奴にハムと酒を差し入れ、新聞を貸してやっていた。

普段ならば酒を飲みたくとも飲めない連中の恨めしそうな姿を肴に朝から飲むのが悪くはないが、同じ船に乗っていた仲間なのだし偶には良いじやろう。

まあ、新聞は失敗だったかも知れんがな。

ロジャーの最期の言葉、新時代を願つての物だったが結果は宝目当ての中途半端な連中が熱に浮かされただけ、その上で自分とやり合っていた相手がこのざまではな。

脱獄を視野に入れて鍛え続けとるし、儂も時々相手をしてやるとるが、血の気の多い若造には困つたものじやよ。

「ルヴァイド、貴様本当にいい加減にしろ！」

「おっと、五月蠅いのが来よつた」

ロジャーとの最後の航海を終え、シャンクスやバギーは自分の海賊団の旗揚げをしたが、儂は満足したから冒険はする意味が無いし、してもロジャー達との冒険に比べて見劣りするじやろう。

でも、儂は働くのが嫌じゃつた。

けれど人間らしい食い物が好きだから何処ぞの島に隠れ住むのは嫌じゃし、街中に住んだらカタギを巻き込む事になるのも分かつつ

た。

その結果が目の前で怒っているマゼランじゃ。

インペルダウンに住んで食いもんとか酒は所員から（勝手に）貰えば良いと判断、捕まるのはなーんか嫌じゃったし、無限地獄まで勝手に来て檻に入って寝てたら大騒ぎじゃったのは笑ったわい。

あんな騒ぎ、マリージョアで町の人間の心の声を生まれ付き使えた見聞色の覇気で聞いてた事を除けばロジャー達との船以来じゃったし。

「貴様、自ら監獄に入っておきながら脱走を繰り返すとは何事だ！」

「あんま怒ってばかりじゃと禿げるぞ？　心無しか額の生え際が

……」

「なにっ!？」

ぷぷっ！　冗談じゃったのに咄嗟に手を当てて確かめるとは単純じゃの、マゼラン。

「ええい！　貴様が此処に住むと勝手に決めて住み着いたが、脱獄されては威信に関わるからと特別待遇を許してやっているというのに！　飯とて運んでやっているだろう！」

マゼランが指差した先には儂の檻、石の床には絨毯が敷かれベッドと机と椅子、小さな棚には数冊の本とお気に入りの曲を録音したトーンダイヤル。

儂の場合、下手に処刑にしようとしたらマリージョアの秘宝やらワンピースの正体とか余計な事を言いそうじゃし、素直に処刑にされる気は無いしで暴れるのは確定で、脱獄しないなら大人しくさせておく為、とかいう理由で用意された物。

食事だつて職員の為に用意された物を同じく出してくれとるな。

「うむ。今朝のメニューは卵サンドにサラダにミルクスープ、紅茶にデザートのリンゴじゃったな。美味かったぞ。肉を食いたかったから盗み食いはしたが」

それはそうとして、食いたい物は食う！

「……」

「なんじゃ？ また腹を下したのか」

「胃痛だ！」

「まあ、この様な場所の責任者じゃし、ストレスは溜まるじやろうな。レイリーもそうじゃったし」

……何故かバレットが呆れ顔なんじゃが。

中

欲しいと思えば物でも、それこそ人であっても手に入り、何をして
も許される。

そんな暮らしを続け、神として扱われる日々には儂は幼い頃から疑問
を抱いていた。

敬つて見えても心の声を聞けば、少し先の未来を見れば、それだけ
で敬意ではなく嫌悪や恐怖、憎悪を向けられていると分かったから
な。

生まれ持つての見聞色の覇気は儂を周囲の同族と違わせ、友人は隣
に住んでいたドンキホーテ家の長男を含んで二人程度。

そういえば風の噂で二人が結婚したらしいが元気にしておるかの
？

他の連中みたくブクブク太っていなければ良いのじゃが。

自分達も人間だという考えに賛同してくれたが、楽観的が過ぎるか
らなあ、あの二人。

知らん方が良いと向けられている敵意については教えなかったが
……まあ、マリージョアから出なけりや大丈夫大丈夫。

そんな儂は偶然手に入れた海賊の航海日誌に夢中となり、父から叱
られようと体を鍛え、直属の組織の者達の体術を見様見真似で会得
した後は家出をし、色々と苦勞をした末にロジャーとレイリーと遭
遇、三日三晩の喧嘩の末に仲良くなった。

レイリーに叱られながらもロジャーと共に心の赴くままに行動し、
海賊として活動して出会った敵や仲間、本当に、本当に心躍る冒険の
日々じゃった。

だからまあ、そんな時に出会った奴と再会すると敵だろうと嬉しい
もんじゃな。

「……テメエ、何やってやがるっ？」

「入浴」

例えばクロコダイル、移送船が来たのは分かっておったが長風呂の気分でな、煮えたぎる大釜の中から顔を出せば怪訝そうな顔をされたわい。

「さて、流石に迷惑じやろうから儂はもう上がるか。それにしてもクロコダイル……随分と弱くなったな」

「……ああ？」

「いやいや、白ひげに叩きのめされるまでバレットとやり合っていたのに、覇気とか見る影も無いし、鈍るにも程があるじやろう」

風呂から飛び出し用意していたタオルで体を拭きつつクロコダイルを眺めるが弱体化したのが見て取れる。

「お前さんも年を取ったって事じやなあ？ 因みに儂は今でも元気」
「ええい！ さっさと自分の牢屋に戻れ！」

「分かっとなるわい。あつ、風呂上がりの牛乳を食糧庫から貰って行くぞ。所で今日の晩飯はなんじゃ？」

今日は魚の気分なんじゃがなあ、出来れば揚げ物。

まあ、此処の飯は過酷な労働だからかガッツリ系が多いし美味しい、隠居所としては悪くないぞ。

「海王類のフライだ！ ほら、さっさと行け！ それと牛乳は一本ままでぞぞ！」

ほいほい、分かっとなるわ。

……コーヒー牛乳とイチゴ牛乳と普通のを一本ずつ持って行くこととしたのが見抜かれたか？

少し惜しい気もするが牛乳をさっさと飲みたい儂はその場から足早に去っていかうとし、知り合いとしてクロコダイルにアドバイスする事にした。

海王類のフライ……うっひよほーい！ タルタルソースよりケチャップとマヨが良いのう、調理場に頼みに寄るか。

あつ、5・5階層の連中の映像電伝虫じゃ、ピースピース！ うえー

い！

「あまり看守に迷惑かけるなよ、クロコダイル。もうヤンチャする年齢でもないんじゃないから落ち着け」

さーて、牛乳はどれにするかの。

「……おい、あの野郎はずつとあなのか？ 昔もああだったか……」
「無駄口を叩かずさっさと大釜に入れ！ ……そして察しろ」

クロコダイルが無限地獄に収監されてからも儂の行動は変わる事はなく、偶に風呂に入ったりサウナを楽しんだり、ハンニバルが隠していたエロ本をベッドの上に並べたり、そんな事をしていたある日の事、久し振りに見る顔が現れた。

「なんじやい。随分と白髪が増えたな、ガープ」

「お前こそ生え際が後退しとるんじゃないのか、ルヴァイド」

ロジャー海賊団を何度も追い詰めた海軍の英雄、モンキー・D・ガープ中将、それがやって来たのは船が近付いた段階で分かっていたが、まさか儂に用とはな。

クロコダイルから何かを聞き出す気だとばかりに思ったが……。

互いに憎まれ口を叩き合うが、此奴とは一種の信頼みたいなもんがある。

天竜人に関して色々と言うの珍しいしな、何奴もビビっちまって言わんのに。

「お前さんに要請じゃ。此処から出てクロコダイルの穴埋めに……よし、断られたので帰るとするか！」

「おうおう、帰れ帰れ。あつ、ついでに空になった酒瓶を看守に渡しといてくれ」

「そんなもん自分で何とかせえ！ 絶対断られると分かつとる要請をしに行くなんざ、書類仕事を部下に押しつける口実にする以外はしたくないわい！」

相変わらず自由な奴、流石はロジャーのライバルじゃった男じゃな。

「所で東の海の方で一千万越えを倒しまくつとるのお前さんの孫か？ 写真を見たが若い頃によく似とる。……昔はあの位に生え際が前の方じゃったのになあ……」

「うっさい！ 断るんなら脱走は良いが脱獄は絶対に許さんからな！」

うーむ、孫の教育を誤つたな、ガープめ。

足取り荒く去っていくガープの背中から視線を外し、新聞のクロスワードパズルへと興味も移す。

なんか世間では儂つてとつくに死んだ扱いにしとる癖に、随分と人材不足なんじゃなあ……。

まあ、勢いで海賊になつただけの若造が多いって事じゃろうが、つぶし合う相手がそんなばっかりなのにカイドウやリンリンは何をやつてるのやら。

「何奴もノリだけで行動してるの。……あつ、そうそう。クロコダイル、プルトンをアラバスタで探しとつたと言つておつたな。暇じゃつたし、パクつて来た葉巻の代価に喋らせたが」

「……それがどうした」

「あれ、新世界に有るらしいぞ。何処にあるかは……バレット」

「……何だ？」

元はやり合っていた二人、会話の途中で名を呼んだ事で随分と緊張した面持ちじゃ……何故じゃ？

「白ひげの船って何て名前じゃつたっけ？ それが分からんと他の列

の問題が分からんでな。クロコダイルは分かるか？」

「知るか！」

なんじゃい、短気な奴等め。

「お前さん達、もう少し落ち着きを身につけるべきじやと思っぞ？」

む？ 何か凄い顔で睨んどのの。

何故か分からんが！

「仕方無い、ハンニャバルにでも聞くとしよう。いや、適当な囚人で良いか」

こんな感じで相変わらずの楽しい日々の中、その若者がやって来た。

「あの背中に入れ墨は白ひげの所のか。海軍もよく捕まえたもんじやのお……戦争になるぞ」

その男の名はエース、ポートガス・D・エース……何処かで聞いた覚えもあるが、儂って重要な事はペロツと話さぬように教えて貰えん事があつたからなあ……。

それにしても白ひげって海賊にしては穏健派、逆に抑止力になって王下七武海要らんくね？ って感じじやが、家族扱いのクルーに手を出せば面倒な奴の所のクルーを捕まえて、公開処刑という言葉も聞こえたが……。

この時、儂は凄く気になる事があつた。

「あんな風に繋がれて、便所とかどうするんじやろ？ あっ、マゼランめ、飯に毒の息を掛けおつたな」

彼奴の前の使い手に散々食らったから山椒みたいにピリリと来るだけの嫌がらせじやが、ムサイ男が念入りに息を吹きかけたかと思うと嫌な気分になった。

下

インペルダウンの周辺はカームベルト、凧の海。只今絶賛大荒れ中の署内と違って随分と穏やかじゃった。

そんな海に向かい、儂は……。

「ふいふい」

小便を垂れ流していた、

いや、年を取るとシモの方がどうしても緩くなるし、日光浴をしながら茶を飲んで昼寝から覚めたらトイレに行くのが億劫でな。

「にしても随分とやりおるわい。シキ以来じゃったな」

足を切り落としてまで脱走した昔の宿敵を思いだし、新たな脱獄者達が向かった方角を眺めながら少し前を思い出す。あの日、自分の足を切り落として檻から脱出した彼奴はトランプタワー製作中の儂の所までやって来た。

「おい、ルヴァイド。俺と一緒に……いや、何でもない。寧ろ一緒に来るな。絶対に来るなよ!」

「それはついて来いって……」

「違うわ!」

彼奴、ノリが悪くなったのお、面倒だし快適な監獄暮らしを捨てる気は無かったがな。

「さて……別にどうなろうと良いんじゃないが、懐かしい連中が驚くのも楽しそうか」

右足にパクった下駄を履き、全身に霸王色と武装色を纏い、見聞色の範囲を狭める事で正確性と範囲を上げ、右足を振り上げた。

「あーした天気になあーれ!!」

足から飛んで行く下駄は黒い稲妻みたいなのを放ちながら水平線の遥か彼方へと消えて行き、少し気になるが未来は見ない事にする。

何故ならば新聞を読んで爆笑する未来が見えたからじゃ。

「さて、茶菓子でも漁るか。栗饅頭あるかの？」

それにしても最近は何分と慌ただしい。落ち着きの無い連中が増えとるからの。

これも時代のうねりか、そんな風に柄にもない事を考えながらウイスキーの小瓶を傾ける、マゼランの名義で勝手に注文した最高級品は美味かった、

時間は戻り、インペルダウンの騒ぎが起き始めた日の朝、珍しく映像電伝虫を使ってマゼランが連絡を寄越して来た。

「海賊女帝？ ああ、ハンニャバルの部屋に昔の手配書が貼っていたな。あの娘っこがどうかしたかの？」

アマゾンリリーの頂点に立つ者、海賊女帝ボア・ハンコック。世界一の美女だの言われているが、七十年代後半の儂からすれば孫みたいな年じゃし、看守共が浮き足立ってるのが理解不明じゃ。

鼻ほじりながら尋ねはしたが、どーも興味が湧かんし、二度寝したいんじゃが。

「捕まえたんか？ ぐ苦労さん。じゃあ、儂は二度寝するから……羊羹！」

「そうだ。貴様の大好物の羊羹、それも天竜人御用達の高級品だぞ。エースの公開処刑に白ひげの介入が予想されるから七武海が強制的に参加する事になったが、ハンコックは参加条件にエースに会わせろと言ってきたが……問題は貴様だ」

「あれじゃろ？ 儂が好き勝手しとつたら本来は敵な七武海に侮られるし、今日一日は大人しい檻で過ごすから羊羹寄越せ」

羊羹、それは儂が酒よりも好む物、好き過ぎてインペルダウンから羊羹を盗み続け、羊羹の話題になると見聞色で察知する程、なので持ち込み禁止の上に禁止ワードにさえなり、重要な犯罪者が入れられる時に大人しくする代価として一口サイズのを貰える程度……じゃが、マゼランが持っているのは進物用の一本丸々、更に最高級品！

「本当に大人しくしていたら明日くれてやる。良いか？ 本当に大人しくしている！」

「儂って七十過ぎじゃし、そんな風に何度も言わんでも分かつとるわい。しかし……」

通信が切られた後、明日の羊羹を楽しみにしながら二度寝を始めたんじゃが懐かしい頃の夢を見た。

ロジャー達との新世界での旅の途中に出会ったアマゾンリリーの戦士、喧嘩を売られたので叩きのめした後で意気投合したが、海賊女帝とやらに似ていたし、家名も同じじゃった……祖母かの？

「大人しくしたらんと羊羹が貰えんから話しかけんが……まあ、別に良いじやろう、どーでも」

何か檻の中を見られるのも威厳に関わるからと荷物を置かれて本人とは会えんかったし、侵入者が居るといのが耳に入ったが関係無い。

「バギーの奴も独り立ちした事じゃし、助けに行ったら羊羹が貰えんしな。ほれほれ、頑張れ頑張れー」

見聞色でどんな状況なのか把握しながら聞こえない声援を送り、羊羹を待ち遠しい気持ちで一杯じゃった。

なのに、なのに、どうして……。

「緑茶が無い、じゃと……」

羊羹は濃くて熱い緑茶を飲みながらが一番美味しい、なのに茶葉を切らしていると言われ、ちよつと霸王色が漏れ出した。

「今日ちゃんと物資が届く。羊羹は今日悪くなるものでもなし、それまで待っているー」

「ぐっ！ ……砂風呂でも浴びて待つか」

（在庫が）失われた物ばかり求めるな！ 無い物は無い！ 儂に残っている物はなんじゃ！

「さっぱりしてから羊羹を楽しむか。 ……ちよいと飢餓地獄まで行ってくるわい」

羊羹が有るよ!!! 仕入れたばかりの茶葉、好物の羊羹、早く食べたい。

こうして儂はレベルⅢへと向かい、離れた場所でバギーがピンチなのをウトウトしながら見守り、看守共が騒がしかったので勝手に新しい茶葉と急須と湯飲みを貰うとレベルⅥまで戻ったのじゃが、信じられない光景が広がっておった。

「ゼハハハハ！ そうだ！ もっと殺し合え！」

見覚えのあるデブとシリユウ、そして知らん連中が戦う囚人達の姿を眺めていたが、儂には無関係。

そう、儂の檻がグチャグチャに荒らされ、羊羹食いながら聴こうと思っていたトーンダイアルは粉々、ベッドはズタズタ、羊羹は……踏み潰されていたんじゃ。

「おい、バレット。これは誰がやった？」

「あの暴れてる連中だ。特別扱いの報いだだよ。テメエの力を知らねえ馬鹿の仕業だ」

「そうか。うん、そうか」

「……ん？ おいおい、アンタが捕まるタマかあ!? 何で此処に居るんだよ、『天魔王』のダンナ！」

天魔王、儂の手配名を呼びながら驚いとるが別にどうでも良い。会話からしてあれじゃろ？ 大体分かる。

「隠居するのに丁度良くてな。住めば都とは言ったもんじゃ」

「ゼハハハハ！ 羊羹を台無しにされたからって親父を一度倒したア
ンタらしいな。……待て、まさか妙に豪華な檻に住んでるくそ爺つて
まさか……」

「あつ、多分儂」

さて、そろそろ敵意をだすか。

「ま、待て！ 俺はアンタと敵対する気はねえ！ 此奴達が勝手に
やった事だ！」

仲間が全員泡を吹いて気絶して随分と焦つとる様子じゃが、白ひげ
の所で海賊として育つたにしては随分と無茶苦茶な弁明じゃの。

呆れるな、本当に。

「お前さんが新しい仲間を選別する為に解放したんじやろう？ じゃ
あお前さんの部下も同然。下は上の命令を聞き、上は下のやらかしの
責任を負う。それが海賊だろうと海軍であろうと守るべき事じゃ」
儂だつて一番上のロジャーの指示通り自由に行動し、副船長のレイ
リーに後始末を任せていた。

儂でさえ守つたのじゃし、ティーチも守らんとかズルじやろう。

気絶したシリユウの刀を拾い上げ、ティーチに近寄ればやけになつ
た様子で鬨を纏いながら拳を振り上げたが

「ち、畜生がああああああ!!」

「覚えておけ。食べ物、特に好物の恨みは強いのだと」

抜刀、からのすれ違う様に静かにティーチの横を通り抜けて切っ先
を鞘に入れる

振り返つたティーチの全身に走つた赤い線は些か歪な牡丹を描き、
血の気の引いた肌は白くなる。

「まあ、来世に記憶を持ち越せるかは知らんが、せめて好きな場所を選
んで逝け。……雪裂き牡丹^{ゆきさきぼたん}」

完全に納刀をした瞬間、ティーチから血が噴き出して体が崩れ落ち

た。

あー、慣れん刀じゃから下手な絵になっちまったよ。

「……ティーチを此処に来させる原因の海軍に八つ当たりするか」
この後、屋上で不貞寝した後で下駄を飛ばしたという訳じゃ。

そして翌日、マゼランの奴が差し入れた羊羹を食いながら読んだ新聞では海軍の敗北が報じられていた。

「エース逃亡、白ひげの死体はシャンクスが回収。……そして赤犬の股間に激突した謎の下駄、か」

ぷっ、ぷはははははははっ！ 面白い！

「なんかもう、監獄暮らしが本当に快適で退屈せんと感じて長くなったのお」

「ゼハハハハ！ 捕まっちゃったもんは仕方無えし、俺はアンタから借りた新聞を楽しみに生きるとするぜ！」

流石に羊羹で殺さんよ、天竜人じゃあるまいし。

まあ、クロスワードパズルは譲らんがな！

「さて、ベーコンとビールでも盗みに行くか」
今日も充実監獄ライフ！ まだまだ長生きする儂じゃった！

その後やあれこれ ①

①五老星の憂鬱

「由々しき事態だぞ。火拳のエースの処刑失敗に加えインペルダウンからの大量脱走。海軍の面子だけの問題では無い」

「世界政府の威信が揺らぐ事があつてはならぬ」

エースの公開処刑失敗から数日後、世界政府のトップであり天竜人の中でも特別な五人の老人。それが頭を痛めていた。

「せめて白ひげの首を晒し物に出来ていればな」

「ジンベエの脱退も沽券に関わるぞ。黒ひげに関しては……いや、捕まえた奴に関する事は止そう。ペラペラ話した計画の内容からして生かしておかねば厄介とだけインペルダウンに伝えよう」

「」「そうだな」」

五人の脳裏を過ぎったのはマリージョアに居た幼い頃から自由だった男の姿。

従えた大型の猛獣を乗り回し、生まれつきの優れた見聞色の覇気で色々と情報を得た上で突如失踪、十年以上経って居所が判明したかと思ふとDの一族率いる海賊団の一員だった。

討伐に向かった海軍に向かって大声で知られては不味い事を教えようとしたり、当時の大将二人を同時に倒し、羊羹の恨みで白ひげとシャボンディ諸島にて大喧嘩して被害を出したりと頭を悩ませる事ばかりだ。

だからインペルダウンに勝手に住み着いたという報告を受けた時にはついに気が狂ったらしいが安心できる、としたが、好き勝手に内部を歩き回り盗難を繰り返していると聞いた時には胃に穴が開いた。彼の死亡説が世界に流れたのは忘れたいという願望の現れだったのだろう。

「彼奴（あの人）なら普通に生きてるだろ」

知り合いの反応はこんな感じであったのだが。

「……何処の誰かとは言わぬが、処刑しようとすれば逃げ出して報復に走るか?」

「何処の誰かとは言わぬがポーネグリフに書かれていた事をビラにして蒔きそうではあるな」

「何処の誰かとは言わぬが、脱走の常習犯なだけでそつとしているのが一番だと思っぞ」

「何処の誰かとは言わぬが、隠居先として気に入っているらしいから荒らされたら動くであろうしな」

「何処の誰かとは言わぬが放置としよう」

「二」さて、胃薬と白湯を持ってこさせよう」二」

触らぬ神に何とやら、五老星も彼等の上に立つ存在も、とある男については放置を推奨し、これ以上の言及は避けるのであった。

②サカズキの災難

「白ひげも！ それを親父と呼ぶ貴様ら馬鹿共も！ 皆等しく敗北者じゃー！」

山場を迎えた頂上決戦、海軍の準備や裏切りを誘発させる策によって危機を迎えた白ひげ海賊団だったがルフィ達の乱入によって戦場は混迷、ボンクレーの吊いの為に決死の覚悟を決めたミスター3の活躍もあってエースの救出に成功するも、サカズキの挑発に乗ったエースが攻撃を仕掛け、ルフィは遂に限界を迎えてしまい膝を付く中、エースとサカズキの拳、火とマグマがぶつかり合っつてエースが焼かれながら吹き飛ばされた。

「悪魔の実には上げっ!」

そして飛来した下駄がコビーの頬を僅かに掠りサカズキの股間にシューット!! 呻き声さえ出せずに前のめりに崩れ落ちる姿にその場の男全員がヒュツとなり血の気の失せた顔をする。

「何をやってるの！ 逃げるわよ！」

「海賊が逃げる！ さっさと追いなさい！」

女性陣だけは平然とし、竦み上がった男共の尻を蹴り飛ばす勢いで

の叱責、結果としてルファイ達は逃亡に成功するのだが……。

「済まない。何があった？」

負傷者を無視して追撃を続ける海軍を止め、戦争を終わらせようとしたシヤンクスは、股間を押さえて泡を拭きながら倒れるサカズキや未だ股間を気にして竦み上がっている一部の男の姿に困惑するのであった。

尚、コビーは下駄の影響で覇気に目覚め、サカズキは危うくオカマになるかと思つたと語る。

そして海軍海賊問わずその場の男は全員揃つて下駄に軽いトラウマが芽生えたとかいないとか……。

「センゴク。サカズキの股間事件……ではなく頂上決戦についてじゃが」

「お前も印象を上書きされたか、ガープ。あの下駄、一体誰が何の目的で……」

昔の敵がインペルダウンから羊羹を台無しにされた腹癒せの悪戯の為であるが知らない方が良いだろう。

かくしてサカズキの股間事件もとい頂上決戦は海軍の敗北で終わってしまった。

③冥王の胃痛

頂上決戦が集結した後、己の弱さを知つたルファイは二年間鍛え直す事を決め、新聞に暗号を潜ませた。

そして女ヶ島付近の猛獣が生息する島まで案内された直後の事、ルファイはある事を思い出す。

「そーいやレイリー。大将ぶつ飛ばした黒い下駄って何だったか分かるか？ こう電気みたいなのがバリバリって見えた気がしたんだけどよ」

自分達は触れさえ出来ない光人間である黄猿に攻撃を当てていた

レイリーとマグマ人間である赤犬に痛撃を与えた下駄。

思わず思い出して竦み上がりそうになりながらも詳しく語るルフィに対し、レイリーは顎に手を当てて考え始めた。

「うーむ。ロギアに攻撃を当てた上にあの場に居た連中が察知出来なかったとなると余程高度な……奴か。奴だな、奴しか……うっ！」

「レイリー？」

「どうかしたのか？ レイリー」

何が起きたのかを理解した故にその様な事が可能な人物が限られ、尚且つ積極的にその場をかき乱しそうな相手と考えれば検討が付く。

結果、冥王と呼ばれた男はストレス性の胃痛が再発してしまった。

「い、いや、大丈夫だ、ルフィ君にハンコック。取り敢えず助けられたとしても礼は言わんで良い相手だ。奴であつても海軍の見張りに気が付かれない程の遠くからではその場に誰かが立っている程度しか分からなかっただろう。少し違えば食らっていたのは君だったかも知れない」

「……一体何者なのじゃ？ あの下駄、妾とて直前まで気が付かなかった。間違い無く霸王色を纏っていたぞ」

「私の昔の仲間……ロジャー海賊団は私とロジャーが始めたが、結成三日後に勝手に飯に参加してな。暇だから冒険に連れて行けと言いついて私が反対したら二人纏めて相手をして力を示すとか言い出して、結局三日間戦つて決着が付かなかった」

「レイリーとロジャーの二人相手にして互角だったのかよ、そのオッサン!？」

「ああ、やる気に随分と左右されるが、白ひげにすら一度勝った事がある男だ。名はルヴァイド。天魔王と呼ばれ四十五億九千万の懸賞金を懸けられた男であり……何とかロジャーの次に自由な男であつたな」

レイリーが思い出すのは現役時代、副船長だからと責任を押し付け、ロジャーが好きにやれと言ったからとカタギに手を出す以外好き勝手に行動、勝手に敵船に喧嘩を売り、寝ずの番の時に襲われたら面倒だと霸王色を使い続けて仲間の睡眠を妨害し、挑んで来る海軍に嫌

がらせをする常習犯。

「最低限のラインを少し超えた位にルールを守るのだが、時に抜け穴を潜り抜け、時に平然と破る。ロジャーにさえ好き勝手に動くなと叱られることがある男だったよ」

当時の苦勞を思い出す様に、同時に楽しい日々を懐かしむように呟き……少し言いにくそうにしながらハンコックの方を見た。

「まあ、好物の羊羹さえ奪わなければ遊び心が騒がぬ限り仲間には優しい男だよ、敵には性根がひん曲がっているが。……それと多分ハンコック、君の祖父だ」

「……妾の？」

「君の祖母が修行中に我々と出会ってな、特にルヴァイドと意気投合したものの互いに恋愛感情は無かったのだが、とある島の宿で前日の寝ずの番明けで寝ている奴の部屋に入って行って妙に艶々して出て来たのだ。……ちよつとムラムラした時に部屋の前を通りかかった、と言っていて……取り敢えず本人には話せんかった」

理解していないルフィを除き、微妙な空気が流れた瞬間であった。

④元見習い達の反応

「船長、妙に機嫌良いですね。ちよつと大所帯になつて焦つてたのに」「ん？ ああ、例の下駄を飛ばしたのが誰かって考えたら一人しか思い浮かばなくてな。死んだ訳が無いとは思ってたが相変わらずハデな人だぜ」

「お頭、随分と上機嫌ですね」

「まあ、死んだって言われていた人が生きてたからな。あんな場所に霸王色と武装色を纏わせた下駄を飛ばして来る人なんて一人しか居ないさ」

その後やあれこれ ②

① ドフラミンゴの恨み

「そういえば今日は新人が来るらしいぞ」

頂上決戦から二年後、相変わらず好き勝手にしながら監獄での隠居ライフを送っているルヴァイド。

盗んで来た酒やツマミのチーズやサラミ、チェリーパイ等を並べてティーチやバレットと

酒盛りの最中、ハンニバルから大人しくしていると言われたのを思い出した。

「ゼハハハハ！ レベルVIに来るとか絶対にロクな奴じゃねえな！」

「テメエも大概だろ。それとルヴァイド、大人しくしてねえな」

「あつ！ ソーセージは一人六本だと言ったじやろ！ 残りはゲームの景品じゃぞ」

「ダンナは既に八本食ってんだろうが……」

「酒も食いもんも儂が持って来たんじやが？」

当然ではあるがティーチとバレットは拘束されているがルヴァイドは囚人服こそ着ているものの端から見れば監獄とは何なのかという光景だ。

酒やらツマミを大量に並べ、七並べの真つ最中。

尚、ティーチとルヴァイドに止められているせいで殆どバレットが何も出せずブチ切れる寸前、そんな時に叫び声が響いた。

「貴様等！ 何をやっとするか！」

「酒盛り」

「ええい！ 新人が来るんだ。もう少し囚人らしくしろ！」

「ぐっ！ 本当がいい加減にしろ！」

キリキリと胃が痛む署員、それをあざ笑う声が響く。

「フッフッフッフッフ。此処は本当に監獄かよ」

「黙れ！ 貴様は大人しく牢に入っていれば良い！」

天夜叉ドンキホーテ・ドフラミンゴ、ティーチ同様に七武海だった男であり、裏でカイドウとの繋がりを築き、ジョーカーという名で武

器の裏取引をしていた事で捕まった……元天竜人である。

「……おい、天魔王」

三人の姿に胃を痛める署員の姿にニヤニヤと笑みを浮かべながら大人しく檻まで向かっていたドフラミンゴだが、不意に（ルヴアイドが勝手に入り込んだ）ルヴアイドが居る檻の前まで来た瞬間に立ち止まり、鎖を持つ署員を引っ張る勢いで顔を近付ける。

「ん？」

「テメエだけは絶対に殺してやる！ テメエさえ余計な事を吹き込まなかつたら俺は天竜人のままだったんだ！」

「えく？ 何か知らんが儂が何を言っても判断して選んで行動した奴が悪いじゃろ」

「……ドンキホーテ・ホーミング。テメエが余計な事を教えたせいで家族を巻き込んだ馬鹿の名だ」

今直ぐにでも殺してやる、そんな事が言い出しそうな空気を出しながら檻に入れられて行くドフラミンゴ。

そして……。

「フッフッフッフッフ。天魔王、さつきから見聞色の未来視でズルしてやがるだろう。反則だぜ、そりゃあ」

普通にババ抜きで遊んでいた。

引くカードが全て手持ちであるルヴアイド、反対に取る瞬間にカードを入れ替えられるドフラミンゴは手持ちに溜まり、ティーチは普通に増減である。

「海賊の勝負にルールなど持ち出すな、野暮じゃぞ、貴様。……そんなんじやからお前とは手を組むのを断ったクロコダイルがバギーと鷹の目とは組む位に嫌われとるんじやって。バギーの事じやから変な悪運発揮しただけじゃろうが」

「ゼハハハハ！ ダチの息子に容赦ねえな、旦那。親友殺した俺が言うのもアレだけだよ」

「いや、儂って親の罪を子には問わんって考えじゃし、それと同じで友達の息子じやろうと情は感じんのじゃって。ほい、上がり」

ティーチとドフラミンゴの手札の数からして既に勝敗は見えた状態、ルヴァイドはちよつと暇だった。

「そうそう。餓鬼の頃に見聞色で知ったんじゃが、あの誰も座らん玉座って有るじやろ？ 実際は……」

尚、この会話はレベルⅥの囚人及び監視の署員も聞いている。

「所で最下位の罰ゲームじゃが、クジを作ったので引いとくれ。八割モノマネにしといたし、ロジャーの最後の瞬間な」

「……テメエ、絶対ぶつ殺す」

因みにそんな理由からエースの親が誰か知っても頂上決戦には参加しなかったし、七武海になりでもしていたら処刑の為に戦ったかも知れないルヴァイドであった。

尚、ロジャーから頼まれてたらちゃんと何かしたし、何なら多分育てたし、ホーミングと出会っていればドフラミンゴとコラソンを保護したらしい。

② ○ツ○○○○の○○ 監獄侵入せずルート

「おいおい、勘弁してくれよお。オムツか？ ミルクか？」

此処は赤髪海賊団の船の中、寝ずの番の当番では無いが、有る意味寝ずの番である赤子の夜泣きの世話にシャンクスでさえも困り果てていた。

夜通し酒宴で盛り上がれる彼も拾った娘であるウタの夜泣きで全然眠れず、子供の世話には四苦八苦。

そろそろ限界を迎えつつもあやすがウタは腕の中で泣き止まず、一瞬だけ意識が遠のいた時、彼の腕の中からウタの姿が消えていた。

「全く、赤子をあやすのもロクに出来んのか、お前達は。もつと見聞色を鍛えれば何で泣いているかなど分かるじやろうが」

「ルヴァイドさん！ ロジャー海賊団解散の時以来だな！」

直ぐ真横に立つルヴァイドの口ずさむ子守歌を聞きながらスヤスヤと安らかな寝息を立てる娘の姿にシャンクスは一安心し、ハツと気付く事が一つ。

「いや、何時の間にも乗り込んだんだ？」

「偶々近くの新海賊船を襲っていたらお前の気配を察知して乗り込んだ。久し振りじゃな、ちと金貸してくれ」

「相変わらずだな、ルヴァイドさん。餓鬼だった頃の俺やバギーから金借りてはカジノに注ぎ込んでたよな。にしても赤ん坊の世話とか何処で学んだんだよ？」

「お前とバギー」

それもそうかとシャンクスは笑い、この後色々あつてルヴァイドが赤髪海賊団に居候する事になり、少し成長したウタにゲームでズルの為の見聞色の使い方を教えたり、キッチンから上手く盗み食いする方法（シャンクスやバギーにも教えていた）を教える等しながら過ごしたある日、音楽の国であるエレジアに一行は立ち寄った。

「それでシャンクスだったら酷いんだよ、ルヴァイドさん！ 私を置いて行くとか言い出すんだもの！」

「ははははは。だったらシャンクスのオムツを換えてやっていた俺が奴の恥ずかしい思い出を教えてやろう。街で好みの女に声を掛けられてノコノコ付いて行ったんじゃないが……」

「おいしいおいしいいいっ!?! その話はするなって言ったよな!?!」

まさか他の連中には言っていないよな!？」

「ウタ以外の赤髪海賊団とロジャー海賊団と白ひげ海賊団、脱獄してたシキとガープとクザンとビッグマムの息子のカタクリ位にしか言つとらん。じゃあ、後で他のも話してやろう。今はお邪魔虫が居るからな」

慌てるシャンクスを後目にルヴァイドは酒瓶を手に外へと出て行き、その夜はウタとの別れを惜しんだ音楽家達が集まり、ウタに様々な楽譜を渡して歌って貰っていた。

そして、ウタが食べたウタウタの実に惹かれて風に乗って来る数枚の楽譜。

トットムジカ、ウタウタの実の使い手が歌うことで顕現する魔王……。

「嵐脚・跳突九」
ちようとうつきゆう

その楽譜は宙を飛び跳ねて四方から襲い掛かる霸王色を纏った九

つの刺突によって引き裂かれ、ベーコンを炙る焚き火によって燃やし
尽くされた。

「何か知らんが楽しい夜に野暮な真似は止めておけ。逆ナンに喜んだ
ら相手がオカマだったシャンクス位に後悔するぞ。……あつ、少し焦
げた」

その後やあれこれ ③

① バギー一味の相談役

「お探しの物はこれかしら?」

「それは俺様のパーツ!?」

道化のバギーとルフィ達との戦いは佳境を迎え、いよいよ決着の時間を迎えようとしていた。

体中をバラバラにした状態から戻そうとするがナミによつて殆どが縛り上げられ腕と足の先が頭にく付いただけの状態。

「ゴムゴムのおくバズーカー!!」

そして両手を大きく後ろに伸ばしたルフィによつて遠くまで吹き飛ばされる。

「おっと。派手にやられたの、バギー」

バギーが荒らしまくった街の空高くまで到達したバギーに向かって海賊船から飛び出した人影がバギーを掴み、そのままルフィ達の前に降り立った。

ラフな格好をして脇腹を掻いている三メートル近い巨漢の老人、威圧感は一切無いがナミは警戒を示した。

尚、空中で顔を掴まれて急降下した勢いでバギーは白目を剥いて気絶していた。

五月蠅いだろうからと思ったこの老人が何かを放ったようにも見えだが……何でもないだろう。

「誰?!」

「いやいや、そんなに警戒しなくても良い。ちよいとバギーの所で相談役をしているだけの老人じゃよ、お嬢さん」

「はあ!? 要するにバギーの仲間って事でしよう! アンタ、此奴もぶっ飛ばしてやんなさい!」

ナミが相手に指先を向けてルフィをけしかけようとして、その相手の姿が視界から消え失せる。

一瞬遅れて踏んでいたバギーの体と周囲の手下達の姿も消え、後ろから声が聞こえて振り返ればバギー達を積み上げて担ぐ彼の姿があった。

「生憎儂が動くのはバギーが負けた時と気が向いた時だけ、その帽子を受け継いだ少年の相手をする気が今は起きんし、此処はさっさと退散しよう。そうそう、宝と海図はあげよう。負ければ全てを失うのが海賊だ。命があるだけでも儲け物じゃろうしな」

一瞬だけルフィの帽子に視線を向け、再び彼は姿を消した。

「はあ!? 宝も海図もやつちまったのかよ、ルヴアイドさん!」

数時間後、船長室にて目を覚ましたバギーだったが宝を全部失った事を聞かされて再び気を失いかねない勢いだ。

反対にルヴアイドの方は高いウイスキーの蓋を外して直接グビグビと飲み、バギーの大声に鬱陶しそうにしていた。

「うっさいのう。お前だつて倒した相手の船から宝を奪うのは散々やって来たじやろうが。やってなくともやられる世界じゃし、海図なんぞ役に立たんのはお前だつて知つとるじやろうが」

「いや、そうだけれどよ。全部売れば一千万ベリーにはなったし、海図も何も知らねえ奴に売れたじやないっすか」

「別に売らんでも有り金全部奪えば良いじやろう。ほれ、前方に海賊船じゃぞ。……遠くで商船が襲われておつたし、随分と稼いどるじやろう。アレを襲おう。儂も今回は出るぞ」

ルヴアイドが指差した外の先にはバギーの船の数倍の大きさを誇る海賊船の姿。

船員だつて多く、当然物資やそれを購入する為の金だつて多く積んでるだろう。

先程ルフィ達に負けたばかりのバギー達では少々厳しい相手だと

及び腰になりそうなバギーであったが、残った酒を一気に飲み干して立ち上がったルヴァイドの言葉に表情が一変する。

「マジっすか!? よっしやあああああっ! 野郎共、派手に戦うぞ、おい! 有り金全部奪い取って麦わらの小僧共に邪魔された宴の続きじゃあああああっ!」

とても嬉しそうな表情で叫ぶバギー。

普段の悪辣で品のない笑みとは違い、今は誇らしさとやる気に満ちた笑顔であった。

尚、暫く後に間違つて海軍の施設に忍び込んで捕まるバギーであったが、自業自得だからと少し放置し、そろそろバギーを迎えに行つてついでにインペルダウンを壊滅させるかと思つていたが頂上決戦が起きたのでマリンプォードまで迎えに行つたルヴァイドであった。

「へえ、今はバギーの所に」

「ああ、表には極力顔出しせんようにしてな。ロジャーとは海賊の在り方が違うが、ライオンが気に入ったから同行させて貰つとる」

「苦労してそうだな、彼奴」

「そりゃあ船長が一番苦労すべきじゃろうて。だから僕は船長とか副船長とかしたくないわい」

その時にちゃんとシャンクスとも再会したルヴァイドであった。

そして少し時は過ぎ、バギーが七武海になった後、制度撤廃によつて討伐対象となったが軍艦はやって来ず、変わりに拠点上空に巨大な何かが現れる。

「げげっ! ありゃあロジャー船長が居ない時に見た……。お、おいつ! ルヴァイドさんはどうした!?!」

「空に向かって跳んでます、キャプテン」

「……よし。助かったな」

空に現れた物、それに見覚えがあったらしいバギーは慌ててルヴァイドを探すが、部下の報告を受けて安堵へと変わった。

「……ふむ。儂も老いて鈍った……とでも思っていたか？ イム。はっはっはっ！ 有り得ん有り得ん。ロジャー海賊団最強と呼ばれた儂が情けない姿を晒すと思ったか！」

上空にそれが現れた時、既にルヴァイドは回転しながら雲の近くまで跳び続け、同時に霸王色の覇気を纏ったその辺の手斧を手に猛烈な勢いで回転をしていた。

「今の儂はあの時よりも強いぞ！ 渦多神地斬風!!」

空より放たれる十六発の雷撃、反対に空に向かって放たれる斬撃の渦、それは正面からぶつかり合い、雷撃を全て切り払い、それを放った何かに僅かに傷を付けて終わる。

「……あー、流石に疲れたわい」

今回、ルヴァイドも余裕があった訳では無い。

寧ろ覇気を沢山使い、彼基準で攻撃に値する威力を出したので少しスッキリしたし、二発目を撃たず去るのならこれ以上は面倒だというのが本音であった。

「熱い茶飲みながら羊羹食いたいし……」

空を見上げれば、対象には今回と同じように昔付けた傷が残り、今回の物よりは浅いが今回の物と重なって一部深くなっている場所がある。

だからだろう、ちよつとだけ気紛れを起こした。

「……ほれっ」

適当に刃先だけに覇気を集中させて投げれば深くなった場所の中心に刺さって、其処から周囲にヒビが広がって行く。

外回りの装甲や部品が僅かに崩れ落ちるも問題無い動きで去って行く中、ルヴァイドの靴が黒く染まって行った。

「羊羹の恨み！」

この時、未来視により、部品が地面に落ちた衝撃により自分の羊羹に向かってお茶の湯飲みが倒れ込むのを見てしまったルヴァイドの表情が面倒そうな物から一変、雷撃を防いだ技と同量の覇気を込めて靴を遙か彼方へと飛ばす。

この時、バギーに貸した金を回収しに来ていたクロコダイルが一部始終を目撃していたのだが……。

「アラバスタ乗っ取るよりあの爺を探して引き込んだ方が早かったんじゃないかねのか？ 胃がやられそうだが。レイリーみてえに額が広くなる位なら……」

割と真剣に選択を誤ったかと悩むクロコダイル、彼に誘われたミホークを加えてクロスギルドという組織が旗揚げされるのは少し後の事である。

「んじや、第一回海軍と世界政府への嫌がらせをどうするか会議！」

「……帰って良いか？」

「十分しているだろう……」

「あのお、これ以上何をやる気つすか？」

クロスギルド幹部三人十御意見番による会議（茶菓子は羊羹）、ルヴァイドによって集められはしたがクロコダイルとミホークにはやる気が見られず、バギーは恐る恐る数日分の新聞を差し出す。

それは虚の玉座が存在するパンゲア城の一部が破壊されたという事、そして四つの海とグランドラインの前半後半併せて六百の到達困難な無人島の何処かにラフテルへのエターナルポースを隠しているという自称ロジャー海賊団の元クルーからのたれ込み。

お陰で世界政府も海軍も海賊も大慌てである。

誰の仕業なのかは……お察しである。

「ワンピースが嘘とか思ってる海賊もおったし、それなら白ひげの言葉の後で広まった嘘に精々踊って貰おうじゃないか。んなモンに頼ってる奴に辿り着ける場所じゃないんじゃないか」

この後、海軍の首に懸賞金がかけられる事にもなったのだが、ちよつとだけインパクトは小さかった。

そして暫く表舞台に出なかったルヴアイトだが、`dead onl`
`y` の懸賞金が更新された。

天魔王ルヴアイト 懸賞金六十六億六千万+天竜人の地位

「よっしゃー！ ロジャーに勝った！ レイリーに自慢しにシャボン
デイ諸島行ってくる！」

その後のあれやこれ ④

「それでお前はこれからどうする気だ？ 新たな海賊団を立ち上げる、というのもらしくない話だしな」

「当然じゃろう？ 船長なんざ責任が伴う役職、誰がする物か。さて、どうすべきか……」

ロジャーの処刑から新たな時代が始まって数年、儂は久々にレイリーの顔を見にシャボンディ諸島までやって来ていた。

どうせなら土産でも持って行くか、と、マリージョアに盗みに入る計画も立てていたのだが、運の良い事に人攫いらしき連中の船がちょうど入港していたので、他の海賊の船共々襲って宝を頂いて間に合わせる事が出来た。

イムの奴が動いたら少し面倒じゃし、神の騎士団の相手も少し面倒じゃしな。

だって、儂がマリージョアに居た時にギャーギャー口喧しく言ってきたファイガーランドの奴が所属してるんじゃないもの、また煩くされたら酒と羊羹が不味くなるわい。

そんなこんなで少し騒ぎになったからシャボンディ諸島は海軍が儂を探し回って居るが、今こうしてレイリーと酒を飲んでいる最中、どうせロックスの残党が暴れてるからグループとかは居ないのだろう、とレイリーが言っていた。

「いや、船長でないにしても貴様は自由過ぎだったからな？」

「仕方が無い。こんな所で出会ったのも何かの縁じゃし、レイリーが家に送り届ける迄に少し鍛えてみるか」

「相変わらず唐突に話す上に、人の話を聞かん奴だな……」

人さらいの船に乗せられていたのは僅か三人の子供、これだけなら後は海軍にでも押し付けければ良いのじゃが、知り合いに似ている気がしたので名を聞いてみれば孫だと言ったのには少し驚かされた。

土産ついでにとレイリーの所に連れて行った後は奥の部屋で疲れ

ていたのか眠っているが……。

「女ヶ島の戦士にしては子供だとしても弱すぎんか？ 儂が同じ年頃の時は我流で覇気と六式を会得していたぞ？」

「いや、お前と一緒にするな。それと話を聞くに母親の年齢から逆算すればあの三人、恐らくだが……お前の孫だぞ」

「ふーん。そうか。ん？」

……マジでか!?

「インペルダウンに勝手に住み着くのも考えていたんじゃがな」

「止めてやれ」

割りとマジな顔で止められた。

「七段変形面白トナカイ」

「非常食」

冬島ドラム王国にて最低の国王であったワポルをぶっ飛ばした麦わらのルフィ、その船に新しく加わったトニー・トニー・チョッパーが医者だった事を知って彼等が驚き、何だと思っていたのか答えた所から物語は始まる。

この後でナミが雪車の中にチョッパーの医療器具を入れた鞆を発見する事になるのだが、正史では混じらなかった声が聞こえた。

「ほう。ヒトヒトの実を食べたトナカイか」

「!？」

自然な様子で突如会話に割って入った老人の声、さも最初から船に乗ってその場所に居たと思える自然な様子でルフィの背後からチョッパーを見下ろす男こそルヴァイド。

服からは水滴が滴り落ち、全身が濡れている事から海から船に上がって来たのだろう。

侵入者の存在に声が掛けられる一瞬まで気が付けなかった一行だが、存在を認識すると同時に即座に動き出した。

「何モンだ、ジジイ！」

「バ、バロックワークスの刺客か！」

ゾロは刀を抜き、サンジも迷わずに蹴りを繰り出したのは相手がただ者ではないと察したからだろう。

だが、遅い。

二人が行動に移り、ウソップが物陰から狙おうとパチンコを取り出した時には既に一行の視線から姿を消し、代わりに階段を上って直ぐの手すりに手を置いて一行を見下ろしていた。

「バロックワークス？ ああ、砂の小僧がやっている裏組織か。いやいや、違う違う。俺は只の元海賊に過ぎんよ」

ニヤニヤと余裕を持った態度で一行の警戒を解きたいのか解きたくないのかルヴアイドは話すが、当然信用などされない。

「どつちにしろ海賊ってんなら……」

「乗り込んだなら敵って事だよな！」

階段の高さを飛び越えて左右から迫るゾロとサンジ。

再び放たれた刀と蹴りに対して今度は避ける様子も見せず、左右に腕を伸ばすだけ。

「嘘でしょ!？」

響いたのはナミの驚きに満ちた叫び声。

ゾロの刀もサンジの蹴りも左右に無造作に伸ばした腕の、それも指先一つで止められていたのだ。

寸止めではないのは二人が歯を喰い縛って押し込もうとしている姿から否定される。

だが、動かない、刀も足も力を加えられて震えているが、前方だけには一寸も動かず、その様な光景の原因となった老人の顔は涼やかで、まるで指先に小鳥でも止まらせているかの様。

その視線はゾロとサンジには向かわず、ルフィの被る帽子に注がれていた。

「その帽子、シャンクスが被っていた物か」

シャンクス、その名前を耳にしたルフィの顔から警戒の色が薄れる。

何かあれば直ぐに動こうとしているのは間違い無いのだろうが、目の前の侵入者と恩人の関係が気になったのだろう。

以前出会った赤い鼻の海賊と違ってシャンクスへの敵意を持っていなさそうなのも関係しているだろうが。

「爺さん、シャンクスの事を知ってんのか？」

「知ってるとも。まあ、それほど大した関係ではないがな。精々が赤ん坊だったシャンクスを宝箱の中から見付けたから船員の皆で育てた、その程度じゃ」

「育ての親じゃないの、大した関係過ぎるでしょ!？」

「おっと、それはそこのお嬢さんのいう通りじゃったな。それはそうと今の航路からしてアラバスタへ向かうのじやろう？　ちよつと乗せてってくれ。泳いで向かってても良いが、ちと面倒でな」

これが麦わらのルフィ一味と元ロジャー海賊団戦闘員“天魔王”ルヴアイドとの出会いであった。

「あっ、船賃として襲って来た海賊から奪った宝箱を渡しておこう。孫娘達への土産と道中の飲食費さえ有れば良いからな」

「オツケー！　ゾロ、サンジ君。一応しつかりと見張っておくのよ！」

尚、一連の会話中も二人の攻撃は受け止められたままであった。

「……寧ろ誰も覚えられないなら全滅するじやろうし」

尚、この後の呟きは誰の耳にも届かず、とあるオカマと遭遇するの
だが、それが別の海賊の胃に余計なダメージを与える事となる。

その後のあれやこれ ⑤

この日、我々世界経済新聞の記者は匿名を条件にとある海賊へのインタビューを行った。

今回は取材を受けて下さり有り難う御座います。所で匿名の理由は？

『ああん？ ちょいと情けねえからだよ。憧れている人のシンボルに泥を塗りたくはねえからな』

成る程。しかし、それなら今回の取材を受けて下さった理由は？

「……人生観が少し変わってな。誰かに話したくなっただけだ」

匿名希望の海賊ことハイエナのベラミーはそう言いながら何枚かの写真を差し出した。

そこに写っていたのは雲の上に存在するとされている空島、そしてなんと雲の上に浮かぶ大地の島の写真であった。

「んで、これが一番重要な写真だが……うそつきノーランドが発見したって言った黄金郷の鐘の写真だ」

ベラミー氏が最後に取り出したのは黄金の大鐘楼、此処でうそつきノーランドについて説明しよう。

とある国の冒険家だったモンブラン・ノーランドは黄金郷を発見したと言ったが、国王が用意した大船団に多大な犠牲を出しつつ向かった末に黄金郷は存在しなかった。

国を騙し多くの犠牲を出した罪で処刑されたノーランドだが、彼は島が海に沈んだと嘘を付き続けた。

その黄金郷は実際は空に飛ばされたんですね。

「ああ、酒場で空島の話をしていた爺を馬鹿にしたら担がれて空島まで連れていかれたんだが、その爺曰くノックアップストリームで運ばれたんだろうってよ」

ノックアップストリームとはグランドラインで発生する真上に向かっての激しい海流であり、その犠牲となった船が落ちて来たのが空島の正体だとされていた。

今回の取材を元にモンブラン・ノーランドの祖国とされた国に取材を申し込むも拒否、現在は賞金首である子孫のモンブラン・クリケツト氏の居場所を探索中である。

これで取材は以上となります。有り難う御座いました。

「ああ。本当に匿名は守れよ」

勿論です。

こうして我々はベラミー氏への取材を終えた。

「ふんふん、あの時の小僧か。あつ、十五番に全額で」

「は、はい」

アラバスタに到着した後、あの若き海賊達と別れた儂はクロコダイルが経営するカジノにやって来ていた。

新聞を片手に持ち込んだ羊羹を齧りつつ未来を見ながらルーレットで稼ぎつつ監視用の電々虫で儂を警戒するクロコダイルの様子を見聞色で伺うが……随分と衰えたもんじゃな。

「さてと……あと二回は数字を当てんと不味いからな」

孫娘に土産も買ったし、後は適当な軍艦を海軍から奪うかと思っておったが、此処で問題が発生した。

いやはや、結構な大金を三人それぞれから借りておったのを忘れてしまったわい。

まあ、海賊でも襲ってしまえば良いが、それでも時間が掛かりそうじゃし、そろそろ孫娘の船を引く蛇の産卵の季節じゃ。

あの卵を使った料理が酒の肴にピッタリとあつては遅れてなるものか。

そうしてルーレットで数字を当てること数回、このまま稼げば道中立ちよった島で一番大きな宿に泊まれるから次はポーカーでも楽しもうと思っていた時じゃ。

従業員の一人が耳打ちしようとして来たのは。

「お客様。オーナーがお会いしたいと仰ってます」

っと、言おうとしたので“おき”の時点で返事をしておく。

「うん？ クロコダイルには適当に稼いだらアラバスタから出ていく予定だとしても伝えてくれ」

「は、はあ……」

「それと随分と稼がせて貰ったし、流石に悪いから情報をやろう。“お主が狙ってるであろう物は多分この国には存在せんで。せいぜい情報じゃ”とでも伝えてくれい」

あつ、やべえ。ニヨン婆にも金借りていたの忘れてた。

女帝の立場使って祖父の借金帳消しにしては……くれんよなあ。

シャンクスやバギーに借りた金は絶賛踏み倒し中の儂じゃが、独自の酒や飯が美味しいアマゾンリリーの連中への借金を踏み倒すのは少し不味いと思う儂。

仕方が無いのもう少し稼ぐべきかと思った時、海賊に強い敵意を持つ者がカジノに接近しているのを感じ取った。

「胃が痛え……糞っ！」

サー・クロコダイルは激怒した、かの自由奔放悪逆無道常識皆無の老害を打倒しなくてはならないと奮起した。

そして、昔を思い出してストレス性の胃痛が再発と共に悪化した。アラバスタを乗っ取る為の計画の要であるオフィサーエージェント、ユートピア計画成功の末には番号に合わせた地位を与える者達……何時までもその地位を約束され続けるとは限らないが、その中の一人であり顔に触れた相手に変身可能なMr. 2ボンクレーが見せたビビの協力者の顔。

その一味の中で触れた相手に次々と変身した後で思い出した様に眩いた。

「そういえば船に乗せて貰っているお爺ちゃんが居たわよお」

「ふん。そんな爺なんざどうでも……ぶふおっ!？」

そしてクロコダイルは吹き出した。

漫画表現ならバギーの口からレイリーの名前が出た時の顔かエネル顔、もうボスとしての威厳とか一瞬で吹き飛んだ感じである。

「あら？ どうしたのかしら？ クロコダイル」

「その爺が厄介で面倒で腹立たしいだけだ。……だが、放置しておいて良いだろう。国の危機だの何だのを知っても好んで首を突っ込む様な奴じゃねえ。寧ろ関わった方が……うっ」

スナスナの実の砂人間であるサー・クロコダイル、物理的な攻撃を完全無効化する彼が久々に受けたダメージは胃痛であった。

キリキリ痛む胃を押さええなかったのはプライド故だが、計画に支障をきたす原因になる可能性は低くともルヴアイドの存在は多大なる心労を彼に与えていた。

そして解散後、カジノに突撃して来るであろうビビ達を罫を用意して待ち構えていた時だ、従業員から大勝している客が居ると報告を受けたのは。

「……今は計画の方が重要だが、少しだけ見ておくか」

計画の末に王になる予定なのだからカジノの財産が多少減った所で問題無いが、待ち人が来るまでの暇潰しにオーナーとしての仕事を「行おうと店内の様子を確かめて……」

「ふぼっ!？」

ルヴアイドだったので再び吹いた。

尚、画面越しに目が合った。

「あの糞爺、一体何をしに来やがったっ!？」

実際は金を稼ぎに来ただけなのだが、疑い深さと過去の恨みから疑心暗鬼に陥るクロコダイル。

国を救いに来たわけではないだろうが、絶対にロクな事をする気
じゃないと疑っている。

故に一応部下を送って対面しようとしたのだが、それを断られて居
る様子を画面で眺めていた時だ、十分稼いだのか店を出ていく姿を目
にして……。

「テメエは天魔王!?!」

店の前でスモーカー大佐と出会った。

その後のあれやこれ ⑥

「天魔王っ！ どうしてテメエみてえな大物が此処に居やがる！」

「いや、普通にギャンブルしに来て大勝ちしたから帰るところじゃが？ カジノに奴隷を買いに来んじやろうに、天竜人じゃあるまいし」
儂の姿を見るなり構える血気盛んな海兵、実力からして大佐辺りかの？

実力的にはもう少し上じやが、若さと血気盛んさ上との折り合いが悪くて出世を積極的に目指さんなら地位は上がらんタイプと見た。

ほほう、名前は……。

「スモーカー君、歩きタバコはどうかと思うぞ？ 臭いが生理的に嫌いな人も居るんじやし、肺が弱かったり妊婦には特に悪影響じやろうて」

儂の言葉に苛立ったスモーカー君の歯がぶつかり合って音を立てる。

啞えていた葉巻は儂の手の中、代わりに変な物でも啞えさせるのも面白いが、仕事の邪魔になるのもな。

「……俺の名前を知ってやがるのか」

「今知った。さて、儂はそろそろ行くから無駄な事をしとらんと職務に戻るんじやな。君の給料の元となつとる天上金の支払いの為に飢餓や戦争が起きる加盟国だつて存在すると知らんのか」

「それが今此処でテメエを見逃す理由になるとでも思つてやがるのかっ！」

いや、なるじやろ。

儂を捕まえたのならガープとセンゴクのコンドいか大将全員に覇王色で気絶せん海兵を大勢連れて来るべきじやろうに、今日の前で儂に向かつて戦闘の意思を見せるスモーカー君とて分かっているじやろうに見逃せんのは誇りや使命感や正義感じやろうな。

「若くて青いの、君。そんな君にプレゼントをしよう。旅先で知った汚職海兵のリストじや。信じるかどうかは君次第じやがな」

では、さらば。

儂はセンゴクにでも送りつけて悪戯しようと思っていたりリストをスモーカー君に向かって投げ、一瞬それに意識を向けた際に目の前から消え去る。

結果、咄嗟にリストを受け取ったスモーカー君はリスト片手に震えるしかない訳で、しかも内容は重要部分が普通は読めない文字で、下に一文毎の翻訳がバラバラに書いてあるから少しづつ照らし合わせる必要さえあった。

「ふざけやがって。……何だ？　最後に顔のイラストと一緒に何か書いて……!?!」

尚、最後にデフォルメされた儂の顔と一緒にワンポイントアドバイス。

『古代文字じゃからリスト原本は上に知られんようにな。じゃないと賞金首かCPのターゲットにされるぞ』

見聞色で見た彼の驚愕の顔はそこそこ笑えたな、うん。

にしても、おでんに習っておいて良かった、古代文字。

どうせならワンピースの正体やイムについても書いておくべきじゃったか？

「二応リストについて調べはするが……麦わらも天魔王も絶対に俺が捕まえてやる！」

因みに流石に気にしたのか店内ではタバコの火を消してるスモーカー君じゃった。

「ほほう、スモーカー君がな。無理じゃろ、普通に考えて。実際の所はどうなんじゃ？ 海賊王」

「黙れ、爺」

あれから数日、よく考えたら旧知の間柄じゃし、中途半端にモヤモヤする情報を教えるのも悪いと思った儂はクロコダイルが囚われている牢屋まで行つたんじゃが、落ちていた新聞の記事で捕縛までのあらしを知つて捏造じゃと見抜く。

いやいや、彼に倒される程は鈍っておらんじゃろ。

あと、何か部下と一緒に仮装しとるのは何で？

閉じ込めてる施設の職員も仮装しとるし、儂だけ何時もの服装で浮いた気分じゃ。

「何じゃ。その様子じゃと王家の墓に設置されたポーネグリフの内容にガツカリしたか」

「黙れと言っているのが聞こえねえか、爺」

「そりゃプルトンが隠された和の国は侍が大勢居る上に今はカイドウの縄張りじゃ。衰えたお主では……うん？」

何か苦虫噛み潰した顔じゃが、何か予想外の裏切りにも合つたつて感じじゃな。

「ニコ・ロビン。とんだ食わせものだったな」

成る程、オハラ学者に騙されたのか。

何か昔から他人を信用しないって言っている割には言葉を鵜呑みにするからの、この頭トンタツタ族。

「因みに他の古代兵器は世界政府が秘蔵しとるぞ」

「なっ!？」

さて、驚いた顔も見たし職員に気付かれる前に出ていくとしようかの。

「空島に行きたい？　おいおい、行く方法を聞いて俺達に教えたのはベラミーだろ。全員生きるか死ぬかってルートか殆ど死ぬってルートしかないって無理だろ」

「空島の実在には驚いたし黄金郷は魅力的だけど、海賊が夢を見る時代は終わったんだらう？　危険を冒してまで行く所じゃないだらうに」

「それにあの人が天魔王嫌いなのは知ってるでしょ？　話題に出しただけでも怒るのに、連れて行かれた場所に夢を見たなんて知られたら殺されるわよ」

ハイエナのベラミーは他人が手に入れた宝を奪うのを好むルーキー海賊であり、天夜叉ドンキホーテ・ドフラミンゴが口にした新時代の海賊にならんとして、多くの海賊が馳せた夢を否定していた彼であったが、空島への到達はその心に火を着けるのに十分であった。

もう一度、今度は抱き抱えられての到達などではなく真つ当な方法での到達を、そして子供の頃に信じて夢を見た伝説の数々を追い求めてみたい、そんな願いを仲間にしたベラミーであったが、返つて来たのは冷淡な夢を否定する反応、少し前まで彼が夢を追う海賊に共に向けていた否定の言葉であった。

それでも一度着いた火は消えはしない。

憧れた相手であるドフラミンゴからの制裁すら覚悟した彼は仲間を巻き込まない為にと一人での無謀な旅をしていた。

一切の常識が通用しないグランドラインで優れた船も航海術も突出した力も持たないベラミーが一人旅を行えるのかどうか、その問い

に答えるのなら、否。

唯の自殺行為であり、ドフラミンゴの怒りを買うよりも前に嵐に巻き込まれ能力者である彼は海の藻屑へと成り果てる。

その

「おい、此奴は記事で見た……」

筈だった。

偶然近くを通り掛かって気を失っているベラミーを助けた海賊団。それは猿を連想させる見た目で……。

「それにしても貴方達、とんでもない大物を乗せていたけれど何処で知り合ったのかしら？ クロコダイルが随分と警戒していたけれど」

「大物？ 誰の事だ？」

「あー、砂ワニが何か言ってたな。テンマオーがどうか」

場面は移り変わってゴーイングメリー号、新しく船に加わったロビンの問いに一同は首を傾げるだけ。

「驚いた……知らないまま乗せていたのね。ほら、アラバスタに来る前に船に乗っていたお爺さんが居たでしょ？ 彼、海賊王の船のNO.3で強さなら一番だって言われていた海賊よ。天魔王ルヴアイド。現在DEAD ONLYという異例の手配がされていて、懸賞金は十六億六千万だった筈」

「へー。あいつ、凄い奴とは知ってたけど、本当に凄かったんだな」

ロビンの言葉に一同が驚く中、ルフィだけは呑気に呟く。

この船の行き先を決めるログポースの示す先が空になる前日の出

来事であつた。